



スポーツイベントと持続可能性

地球・人間環境フォーラム 研究員 天野 路子

脱使い捨て、循環型社会の構築を リユースカップでごみゼロのイベントを目指して

東京2020大会 ごみゼロを目指した大会運営を

SUSPON(持続可能なスポーツイベントを実現するNGO/NPOネットワーク)の7つある部会のうちの1つ、「ごみゼロ部会」には6つの団体が参加しています。

同部会では、2020年東京オリンピック・パラリンピック(以下、東京2020大会)で、ごみゼロを目指した大会運営が行われるべきと考えています。この大会を契機に、脱「使い捨て」の取り組みを定着させ、循環型社会を構築していくよう、同部会では、洗って繰り返し使えるリユースカップの導入や、水飲み・給水インフラの導入推進、食品ロス(食べられるのに捨てられている食べ物)削減などに取り組んでいます。

本稿では、リユースカップの取り組みを紹介します。

環境だけでなく福祉への貢献 や災害時にも活用

洗って繰り返し使えるどんぶりやお皿、カトラリーなどを「リユース食器」と呼んでおり、リユースカップもその一種です。軽く、落としても鋭角的に割れないポリプロピレン(PP)製のものが一般的で、屋外の

イベントなどでよく使われています。

リユースカップは1990年代後半、ドイツのサッカー場やお祭り・イベント会場から出るごみを減量するための取り組みとして始まり、世界的に普及してきました。日本では2000年代初めから、全国各地のお祭りやイベント、サッカー場などで導入が進んでいきました。

ちなみに、日本三大祭りの祇園祭(京都市、写真1)では2014年から、天神祭(大阪市)では2017年からリユースカップとリユーストレーが導入されています。

リユースカップの洗浄・保管は社会福祉施設が担うことが多いため、

環境と福祉をつなぐ取り組みとして広がっているほか、地震などの災害発生時の非常用食器としても活用されています。

国内のスタジアムやイベント会場で使用されたリユース食器は、原則回収し、洗浄して繰り返し使うのが一般的です。

持ち帰りを推奨する運用方式

スポーツイベントでは、試合開始前やハーフタイムなど、特定の短い時間に観客が飲食物の売店に集中します。当然、大勢の観客で混雑するため、リユースカップやリユース食器の回収作業は難しい状況にありました。



写真1 京都の祇園祭では約20万個のリユース食器を導入し、ボランティア2000人がごみゼロのお祭りにするための活動を行っている(写真は一部加工してあります)

特にメガスポーツイベントでは、大量のリユース食器が必要になるため、製造・洗浄・輸送費が使い捨て食器に比べて多くかかるほか、利用者に返却を周知徹底するためのコストも障壁となり、リユースカップやリユース食器の導入に至っていませんでした。

一方、フランスでは、デザイン性の高いイベント限定のオリジナル・リユースカップが使われ、来場者の8割が記念に持ち帰り利用しています。この方式で年間7000万個のオリジナル・リユースカップが利用され、ごみ減量に効果をあげています。

フランスの一部自治体では、イベントでの使い捨て容器の使用を禁止する条例が制定されており、同国内で開催されるサッカーやラグビーの試合でオリジナル・リユースカップが導入されています。このほか、2015年のラグビーワールドカップ（イングランドで開催）や、欧州サッカー連盟が主催する欧州選手権（EURO）などのメガスポーツイベントでも導入されていました。

味の素スタジアムで試験導入

SUSPONのごみゼロ部会に参加する地球・人間環境フォーラムとNPO iPledgeは昨年11月3日、プラスチック製品の製造・販売を行う株式会社・台和（東京）、社会福祉法人・きょうされんリサイクル洗びんセンター（同）と協働で、東京都調布市の味の素スタジアム（東京スタジアム）で開催されたリポビタンDチャレンジカップ2018ラグビー日本代表対ニュージーランド代表の試合で、リユースカップを導入しました。

フランスの事例を参考に、試合限定デザインのリユースカップ（写真2）をつくり、利用者が持ち帰って利用

することを推奨しました。持ち帰らない場合は、返却するとカップ代が返金される仕組みにしました。ソフトドリンクについては、ごみ減量のため、プラスチック製の使い捨てのフタとストローを付けずに提供しました。

この試合は、日本国内で開催されたラグビー日本代表戦としては過去最多となる4万3571人が来場し、リユースカップ9885個が来場者に渡され、うち939個が返却されました。実に、90.5%の人たちが持ち帰ったのです。このリユースカップが非常に好評で、同じカップを使って何杯もおかわりする光景が見られたことから、1個で複数の使い捨て容器を削減する効果があったことになります。

ソフトドリンクにフタとストローが付いていないことについて、クレームを付けられることもありませんでした。

このスタジアムでは、ラグビーワールドカップ2019の開幕戦が開催され、東京2020大会では、サッカー・ラグビー・近代五種の会場にもなっています。昨年11月のラグビーの国際試合により、この会場で多くの観客を対象に、リユースカップを混乱なくスムーズに運用できることが実証されました。

リユースカップをレガシーに

味の素スタジアムでの試験導入では、主催者やスタジアム、売店などと何回も意見交換を行い、観客で混雑するスタジアムでのリユースカップのスムーズな運用の仕組みを検討し、カップの持ち帰りを観客に推奨しました。

リユースカップは、繰り返し使用することで環境負荷の低減につながり



写真2 ラグビー日本代表の選手がデザインされた限定リユースカップ

ます。カップは会場内で回収するのが原則ですが、持ち帰りを推奨する場合は、必ず利用者に環境メッセージを伝え、お土産として飾るのではなく、カップとして再利用してもらうことを働きかけることが大切です。

使い捨てプラスチックを削減していく流れが世界的に加速する中、リユースカップ、リユース食器の素材について、再生原料や非化石燃料由来の原料を使用することも検討されています。

東京2020大会の持続可能性に配慮した運営計画には、SDGs（持続可能な開発目標）のゴール12「持続可能な消費と生産の形態を確保する」ことを実現するため、運営時の廃棄物の再使用・再生利用を進めることができます。その1つの取り組みとして、「リユース食器の利用に可能な限り取り組む」ことが明記されています。

東京2020大会でのリユースカップ導入がレガシー（遺産）となり、スポーツイベントでリユースカップを使うことがごく当たり前になり、脱「使い捨て」が定着することを期待します。■

